

(3)

氏名	寺口 佐與子 (てらぐち さよこ)
学位の種類	博士(看護学)
学位授与番号	甲 第 3 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 7 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項該当
学位論文題名	乳がん術後患者の体重変化の影響要因とリンパ浮腫発症との関連に関する研究  (Study of factors influencing body-weight changes in postoperative breast cancer patients and the correlation with lymphedema onset)
論文審査委員	(主) 教授 田中 克子 教授 津田 泰宏 教授 赤澤 千春

### 学位論文内容の要旨

#### 《緒言》

乳がん術後後遺症のひとつである続発性リンパ浮腫の生涯発症率は、平均 30%とされ(日本医療リンパドレナージ協会, 2014), 患者は生涯にわたりリンパ浮腫を発症する危険因子をもつ。リンパ浮腫の危険因子の一つである体重増加は、皮下脂肪による圧迫が生じることからリンパ浮腫を助長されるため、体重指導は重要とされる。しかしながら、リンパ浮腫の発症リスクに、生活習慣、身体状況、日常生活行動との関連(Marrs,2007), リンパ浮腫の程度と肥満の指摘(Shaw,2007)はあるが後ろ向き研究が多く、リンパ浮腫発症に関連すると考えられる多様な要素が不明確な現状があった。

そこで本研究では、第1に乳がん術後リンパ浮腫を発症した患者の体重増減に影響する日常生活の現状を明らかにし、第2に、乳がん術後患者の体重変化の影響要因とリンパ浮腫発症の縦断的検討が必要と考えた。

#### 《目的》

本研究の目的は、乳がん術後患者の体重増減の影響要因とリンパ浮腫発症との関連について検討することである。

第1研究では、乳がん術後にリンパ浮腫を発症した患者の体重増減に影響する日常生活の特徴について質的研究デザインにより明らかにすることを目的とした。

第2研究では、第1研究結果より体重増減に影響する要因となった術後ホルモン剤投与中の乳がん術後患者の体重変化に影響する要因とリンパ浮腫発症との関連について縦断的に明らかにすることを目的とした。

#### 《方法》

第1研究では、近畿圏内のがん診療拠点 A 病院の乳腺外科外来に通院中の乳がん術後 5 年以内のリンパ浮腫発症女性患者 5 名(平均年齢 64.8 歳)を研究参加者とし、半構成的面接によりデータを取得内容分析を行った。

第2研究では、ベースライン調査 52 名、追跡調査 1 回目 46 名・2 回目 17 名を研究対象とした。初回から計 3 回の調査時に、体組成および上肢周囲径を測定し、初回の値を基準としてリンパ浮腫発症の兆候を観察した。調査期間 3 回の体重変化は、調査期間全体と各調査期間の体重変化率を算出し初回および術前体重と比較した。また、初回調査後に 2 週間連続して自宅での体重測定とホルモン剤の服用を含めて日常生活の記録を依頼し、体重変化の影響要因を分析した。

#### 《結果および結論》

第1研究では、109 コード、10 サブカテゴリーが抽出され、さらに 3 つのカテゴリーが導き出された。その結果、乳がん術後リンパ浮腫患者の体重増減に影響する日常生活の特徴は、【リンパ浮腫予防行動と浮腫悪化の日常生活】の二側面があり、その背景には【浮腫の前の日常生活の変化】を感じており、【体重増減に影響する要因】を抱えていることが明らかとなった。

第2研究では、ホルモン剤開始後平均 7.3±8.4 ヶ月の縦断的体重変化は、軽微な体重増加を示し、術前との比較では体重増加 1.9±4.2Kg の傾向にあった。追跡調査 1 回目では、ホルモン剤の投与期間と体組成によるリンパ浮腫発症の兆候との関係がみられた(p<.007)。また、術前肥満、ホルモン剤の併用による多剤使用、身体活動量の低下、内臓脂肪は体重変化の影響要因であった。また、ホルモン剤投与中は、副作用を自覚し身体活動の低下につながっていた。今後、ホルモン剤の投与期間や体重変化に影響する要因を考慮し、術後早期からリンパ浮腫発症予防の指導が重要と考えられる。

以上の研究プロセスを経て、乳がん術後患者に対して、現行指導の退院後 1 ヶ月に限らず術後継続して外来で体組成の測定を実施し、体重変化と潜在的なリンパ浮腫の早期発見につなげることが重要となる。特に、術後ホルモン剤を投与中の期間においては、体重変化の影響要因を考慮したリンパ浮腫発症予防指導を継続していく必要がある。

## 《Key word》

乳がん術後, リンパ浮腫, ホルモン剤, 体重変化, 縦断調査

## 論文審査結果の要旨

本研究の目的は、乳がん術後患者の体重増減の影響要因とリンパ浮腫発症との関連について検討することである。

第 1 研究は、乳がん術後にリンパ浮腫を発症した患者の体重増減に影響する日常生活の特徴について質的研究デザインにより明らかにすることを目的とした、乳がん術後 5 年以内のリンパ浮腫発症女性患者 5 名 (平均年齢 64.8 歳) を研究参加者とし、半構成的面接によりデータを得て内容分析を行った。結果、患者の体重増減に影響する日常生活の特徴は、【リンパ浮腫予防行動と浮腫悪化の日常生活】の二側面があり、その背景には【浮腫の前の日常生活の変化】を感じており、【体重増減に影響する要因】を抱えていた。

第 2 研究は、体重増減に影響する要因となった術後ホルモン剤投与中の乳がん術後患者の体重変化に影響する要因とリンパ浮腫発症との関連について縦断的に明らかにすることを目的とした。ベースライン調査 52 名、調査 1 回目 46 名・2 回目 17 名を研究対象とした。計 3 回の調査時に、体組成および上肢周囲径を測定し、初回の値を基準としてリンパ浮腫発症の兆候を観察した。調査期間 3 回の体重変化は、調査期間全体と各調査期間の体重変化率を算出し初回および術前体重と比較した。また、初回調査後に 2 週間連続して自宅での体重測定とホルモン剤開始後平均 7.3±8.4 ヶ月の体重変化は、術前との比較では体重増加 1.9±4.2Kg の傾向にあった。調査 1 回目は、ホルモン剤の投与期間と体組成によるリンパ浮腫発症の兆候との関係がみられた ( $p<.007$ )。術前肥満、ホルモン剤の併用による多剤使用、身体活動量の低下、内臓脂肪は体重変化の影響要因であった。また、ホルモン剤投与中は、副作用を自覚し身体活動の低下につながっていた。以上のことから、術後ホルモン剤を投与中の期間は、体重変化の影響要因を考慮したリンパ浮腫発症予防指導を継続していく必要があるという結果は、乳がん患者の援助の新たな視点であると考えられる。

以上により、本論文は本学大学院学則第 11 条第 2 項に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

大阪医科大学雑誌: 第 76 巻 3 号, 18-28 項, 2017 年